

7-4. ハスモンヨトウ

1. ハスモンヨトウの発生生態の概要

ハスモンヨトウの被害は5月頃から始まり、通常、8月下旬から11月にかけて被害は本格化する。加害作物は、野菜類、花き類、果樹類、豆類、イモ類など多岐にわたる。多発年には7月から被害が本格化する。施設内で越冬し、促成イチゴでは12月頃まで秋に産卵した世代による被害が見られる。また、防除を怠ると、1月以降も断続的に被害が発生する。

卵は一ヶ所に集中して産卵され（卵塊）、ふ化後の若齢幼虫はその周辺で集団加害する。中齢以降の幼虫は周囲に分散し、加害量も多くなるため被害が拡大する。また、老齢幼虫は果実も加害し、日中は株元などに潜み、夜間に食害する。

陸地から離れた洋上での飛来が観察されることや、台風通過後などに九州などにおいて同時に突発的にフェロモントラップ誘殺数が増加することなどから、海外から長距離移動をしていると推定されている。

これまで防除効果の高かった、ピレスロイド系剤【3A】やカーバメート系剤【1A】などに対する薬剤感受性が低下している場合があり、年次や地域によりその程度にばらつきがある。また、若齢幼虫への薬剤防除効果は高いが、老齢幼虫では低くなるため、早期の防除を心がける。

防虫ネットを利用してネット上やハウス資材上に産卵し、ふ化幼虫が侵入し、加害する。特に、促成イチゴでは、苗の定植からビニル被覆までの間にイチゴやハウス資材上に産卵するため、ビニル被覆後に卵から孵化した幼虫が新芽を加害する。この時期にはミツバチを導入し、使用できる殺虫剤が制限される。また、イチゴではBT剤【11A】の効果が他の作物より低くなるので注意する。

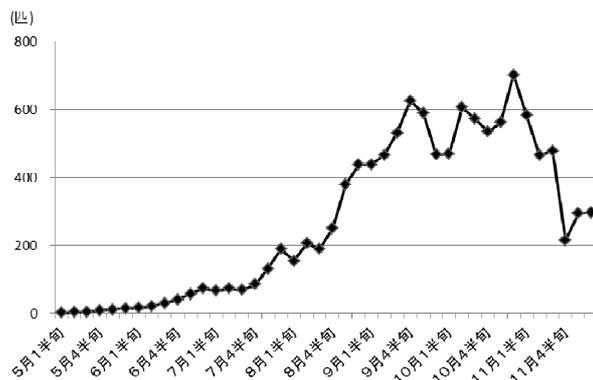


図1 ハスモンヨトウの性フェロモントラップ誘殺数(種原市: 2005-2014年平均)

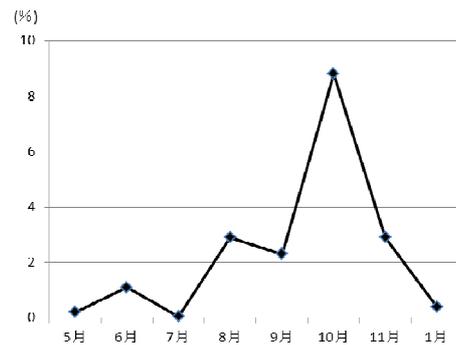


図2 鹿児島における促成イチゴのハスモンヨトウ被害株率
(種子防除所の調査による: 2005-2014年平均)
※5月-8月は育苗中の調査結果、12月のデータなし

2. 防除対策

(1) 物理的防除法

- ① 卵塊や若齢幼虫の集団は、見つけ次第捕殺する。
- ② 施設栽培の場合は、4mm 目合いネットで開放部（サイド、天窓、出入り口、換気口など）を被覆して、外部からの成虫侵入を防ぐと効果がある。
- ③ 圃場全体に黄色灯を設置して、植物体の草冠部の明るさを1ルクス以上にするると雌成虫は行動が抑制され、産卵しなくなる。カーネーションやバラ、ナスなどでは、他府県で実用化されている。しかし、イネやキク、イチゴなどでは夜間の照明により開花が遅れるなどの障害が出るので注意する。

(2) 化学的防除法

農業使用にあたっては、作物ごとの農薬登録を確認し、使用基準を守って使用する

- ① 周囲のダイズやサトイモほ場の発生状況から、幼虫の発生時期を判断し、若齢幼虫期に IGR 剤（キチン生合成阻害剤：ノーモルト乳剤【15】、アタブロン乳剤【15】など）や B T 剤（アイザワイ系：ゼンターリ顆粒水和剤【11A】など）の薬剤散布を行うと防除効果は高い。IGR 剤のキチン生合成阻害剤は効果発現が遅く、数日は被害が止まらないので中齢以降の幼虫への使用には注意が必要である。また、B T 剤のうち、アイザワイ系は効果が高いが、クルスターキ系は効果が低いので注意する。
- ② コテツフロアブル【13】やトルネードフロアブル【22A】、フェニックス顆粒水和剤【28】（ジアミド系）、プレオフロアブル【UN】、アフーム乳剤【6】、一部の IGR 剤（脱皮促進剤：マトリックフロアブル【18】、ファルコンフロアブル【18】等）は、中齢幼虫期以降でも効果が高い。
- ③ おおむね 10 月中旬以降の気温の低い時期には、①の IGR 剤や B T 剤は効果発現に時間がかかること、若齢～老齢の幼虫が混発することが多いことから、②の薬剤を散布する方が効果は高い。